解答・解説　国語　NO.36

〈解答〉

1　1　五段活用　連体形

2　〔例〕彼がどういう人物かを考え、仲よくなれそうなら、そのための努力を始める（34字）

3　エ

4　ウ

配点　1　1、3は各2点、他は各3点　10点満点

〈解説〉

1

1　「話す」の活用語尾は「さ・そ／し／す／す／せ／せ」なので、五段活用動詞である。接続する語は「時（体言）」なので、活用形は連体形である。

2　傍線②の直後にある「（『太田さん』や『あなた』など、呼び方を）より丁寧にするということは、『もっと距離を置く』ということになります。距離を置いて、『いったい彼は、どういう人物なんだろう?』と考えることができます。距離を置いて考えて、仲よくなれるものだったら、『もういちど改めて仲よくなる努力』を始めればいい」という部分を参考にまとめる。つまり、呼び方を丁寧にすることで、相手との距離ができるので、「いったい彼は、どういう人物なんだろう?」と、相手の人物像を冷静な目で見つめ直すことができ、見つめ直すことで仲よくなるべき相手と判断できれば、「もういちど改めて仲よくなる努力」をすることにもつながると、筆者は述べているのである。「どういう人物であるかを確かめるため」と、「仲よくなれそうなら、改めて仲よくなる努力を始めるため」という二つの内容を入れてまとめること。

3　本文では、日本語の「二人称の代名詞」を例にとり、一つの意味や内容を示す言葉が、日本語にはさまざまあって、それが日本語の「豊かな表現力」にもつながっていることが述べられている。この設問では、そうした日本語の「表現力の豊かさ」を示す例として、ふさわしくないものを選ぶことが求められている。アは「風」という一つの事象において、その「強弱や吹きかた」で言葉が使い分けられている例、イは「宿泊施設」の呼び名を分けて使うことで、細かな意味合いが表現できるという例、ウは「雨」の「降りかたや季節の違い」を基準として、それぞれに名前がつけられている例、オは「ほぼ同じ時間帯」で

あっても、少しの変化に応じて呼び名が変わる例が、それぞれ述べられており、一つの事象や、ほぼ同じ範囲の事柄であっても、さまざまな変化に伴って言葉の使い分け（選択）ができるという日本語のよさが述べられている。つまり、日本語の「表現力の豊かさ」を示す例となっているのである。一方、医療における診療の専門分野区分を示す「眼科」「皮膚科」「内科」といった名称の違いは、日本語の「表現力の豊かさ」を示すのではなく、一定の基準にもとづいた単なる分類である。よって、エが適当ではない。

4　第五～六段落にある「あなたが『よくわからない』と思うのは、その『よさ』もまたよくわからないから」、「『日本語はめんどうだから嫌いだ』と言う前に、『自分はまだ日本語の表現力の豊かさがわからないんだ』と思わなければなりません」という部分が、本文のまとめの言葉で、要は「『よくわからない』『めんどう』という日本語に対する評価は『いろいろな言い方』を用意してくれているという日本語の『よさ』を理解していないことであり、日本語を使うのであれば、その『よさ』をわかった上で使いこなさなければならない」と結論付けて筆者は述べている。この内容と、ウが一致することを確認する。ちなみに、ア「（仲がよくない人に）親しげに話しかけることで、二人の関係が劇的に改善する」、イ「（相手が）自分との距離を置こうとしている時には、自分も相手に合わせるべき」、エ「日本語に、特殊な能力や機能が備わっている」、オ「（日本語は）相手が理解できる言葉かどうかを、よく考えて使うことが重要」の部分が、それぞれ適当ではない。